

## 北須磨保育センター訪問から学び得ること

—「遊び」・「保育」・「発達の保障」再考への契機—

佐治由美子

菊地 知子

### 訪問の概要

太陽の眩しさにも気だるく渡る風にも、まだまだ夏の名残りを感じる二〇〇六年九月初旬、私たちは、かねてより訪れたいと思っていた北須磨保育センター訪問の機を得た。昨今の幼保一元化の合唱が聞こえ出すはるか以前から「保育一元化」を明言

化していた守屋光雄を長として、昭和四十四年四月に神戸市須磨区の北須磨団地内に産声をあげた日本の生活共同組合立（註1）の保育施設である。最寄のバス停から歩いて、センター到着が九時半過ぎ。決して広くはない園庭には、すでに思い思いに遊び始めている子どもたちの姿があった。送り届けた母親たちが、手を額にかざしながら、あるいは

木陰や玄関先で、ひとときのおしゃべりを楽しむ姿もあり、遠路よりの来訪者に気づくと、皆明るく「おはようございます」と声をかけてくれる。中には「よろしくお願ひします」と言ってくださる方もいて、この場を信頼して子どもを預ける人たちの思いに違わぬ見学をしたいという気持ちにさせられた。子ども用の玄関から二階建ての建物に入ると、職員室を中心に左右に振り分けられており、聞けば右側には〇、一、二歳や一時預かり・地域の子育てグループの活動用の保育室などがあり、左側は幼保混合の三、四、五歳の保育室とのことであった。

私たちはまず、職員室わきの会議室で、事務長さんから、センターの成り立ちや現在の状況について、用意してくださった潤沢な資料を基に、地域情勢や他業種との連携なども含めて、多岐にわたる詳しい説明をしていただいた。

その後、ご自身が北須磨保育センターの出身で、現在二人目のお子さんが在籍という保護者にお話を

伺うことができた。長時間児、短時間児、どちらかがどちらかをうらやましいとか混乱するとか可愛そうに思うなどは特に無く、子どもたちは淡々とお互い混ざり合っただけで過ごしてきたし、わが子を見ていると現在もそうだと思うと言われた。この方は、ご自身が保育センター在園中に不幸にも父君を亡くされ、しばらく親戚に身を寄せた後でこの地に戻られた。転園することもなく北須磨保育センターに当たり前に戻ってきて「お帰りー。待ってたよ」と言われて、当時の言い方で言うところの「お昼寝組」での生活を再開できたことは、とてもありがたかったと振り返っておられたことが印象深い。

さらには、幼稚園長林先生の案内で、短い時間ではあったが、保育中の施設内を見せていただいた。各クラスには保育士と幼稚園教諭の両者が配置され、そのクラスや立場を超えて職員間で伝達を密にし、連携することの必要性とそのための努力を話された。しかし同時に、子どもたちの方はごく自然に

「ぼく長時間やし、これからお昼寝や」、とか、「短時間はもうお部屋に集まるんやな」などと、当たり前を確認したり、やり取りしているのだという。五歳児三クラスの子どもたちがひとつの部屋に集まり、思い思いに、けれど熱心に、運動会について話し合う姿をわずかが見ることができた。

勤務時間や給与体制、どの資格による勤務であるかなど、一元化施設といわれるところが必ず直面する難局を、北須磨がすっかり乗り越えてしまったわけではないだろう。しかし、少なくとも乗り越えるための連綿と続く努力と、小さからぬ何らかの結実を、垣間見たように思う。

そしてそれは、保育センター設立の理念ともいえる、今は亡き守屋光雄先生の保育観があつてこそその結実であり努力であろうと思われる。以下に、著作『あそび保育のすすめ』を中心に守屋光雄の保育観に触れ、「遊び」「保育」「幼児期の発達の保障」について考えてみたいと思う。

## 守屋光雄の保育論に学ぶ

昭和四十四年、守屋は、北須磨保育センターの創設にあたり、「幼保一元化」ではなく「保育一元化」の施設として始動させた。

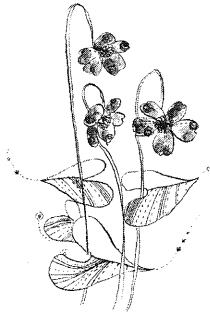
守屋のいう「保育一元化」とは、幼稚園、保育所という既存の概念を越えて、新しい保育体制を創造することを意味していた。この新しい体制は、三つの権利―①乳幼児の発達権、②保育者の研究権、③働く親の労働権と育児権―が、同時保障されるものとした。そして、この理念に基づいて保育センターという一つの建物と敷地の中で、幼保の差別・分断なしに子どもの発達を保障することを根本に据えた、独自の保育が行われることとなった(二つの権利の詳細については、紙数の関係でこれ以上立ち入ることができない)。

また、この新しい体制においては、保育内容・方法も当時のものを見直し、①与える保育から子ども

が能動的に活動する保育へ、②子どもの発達の量よりも質を高める保育へ、という二つのテーマから取り組んでいったという。この取り組みの中から、具体的な保育の形として生み出されたものが、当センターを特色づけている「あそびの保育」である。

「幼児の生活はあそびそのものだ。あそびを通して、子どもたちは発達するのだといわれています。

このあそびというところを、夢中になって取り組んでいる活動ということに置き換えるわけです。あそびというのは、ほかからの命令とか、指示、拘束、あるいは損得勘定がないものなんです。そんなことから、全く解放されたところで、新しい創造活動をするこゝなんですよ」と守屋は語っている。子ども



がやりたいことをやり、またそれをやり通すという過程でこそ子どもの発達が保障されると確信していた守屋は、「よくあそべ、よくあそべ、そしてもっとあそべ」と「あそびの保育」を推進していった。ここで時代を遡るが、倉橋惣三の『育ての心』を繙いてみると、倉橋は昭和十一年、あまりにもよく知られているその序文において、次のような発達観を示している。

「自ら育つものを育たせようとする心。それが育ての心である。……中略……育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つものの偉おほきな力を信頼し、敬重して、その発達の途に遵うて発達をとりしめようとする」。

ここで浮き彫りにされているのは、個々の子どもの発達の道筋にそってその子どもを援助しようとする保育者の姿である。ここに、守屋の提唱した子どもの発達を保障する保育の理念をもつてきてみると、自然と重なってくるように思えてならない。

また、守屋は、共に育つていこうとする教育を「共育」と呼び、保育する者が子どもと共に育とうとしなければならないという。倉橋もまた、次のように記している。

「それにしても、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等の心を育てて自らの心も育つ教育者、育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である」。

昭和十一年といえば、守屋が京都大学を卒業した年でもある。守屋はその学位論文のテーマを、「乳幼児保育の基本的状況―保育学の成立基盤」とし、保育の概念を乳幼児の発達と保障ということである、そこから、保育を学問として成立させることを考えていた。この時期に発達心理学の学徒であった守屋の保育論の下地に、大正期から昭和期にかけて日本の幼児教育理論の基盤を築いたといわれる倉橋の保育観が根付いている可能性は高いと思われる。

このように考えてみると、北須磨の保育は、倉橋保育論の流れの中にあるお茶の水女子大学附属幼稚園の保育と、形態の違いはあれ保育の原点を辿れば通底しているような気がしてくる。しかし、この考察は、推論の域を出るものではない。今後さらに資料を詳細にあたっていく必要を感じているところである(註2)。

### 過去の見識との連携

#### 〈今後の保育研究へとつなぐ試み

ここに、子どもが、命令も強要も指示もなく、遊びに生きて自ら育たずにはおれないその自然<sup>じねん</sup>の理、当然の成り行きを発達と捉え、発達を遊びによって保障せんとする透徹した保育観が浮かび上がる。夢中になって取り組んでいる活動すなわちあそびに生きてこそ、子どもの発達は保障され、子どもの発達を保育において保障していくという、古くして新しい命題に、私たちはたどり着くわけである。

生活の変化や政策と呼ばれる諸所の方針の変化に<sup>へんげ</sup>より、子どもを取り巻く状況もさまざまに変化する今、子ども自身の何が、いかに育つことが、変わらずに大切であり必要であるのか。過去の知恵や良識を排除することからではなくそれらに学び、それを継承発展していく願いをもって、私たちは考え始めることができるのかもしれない。

北須磨保育センターを訪問し、守屋光雄の保育観を探ってみることで、私たちはまたひとつ、光を得たように思うのである。  
(お茶の水女子大学)

#### 註

1 設立当時。現在は社会福祉法人北須磨保育センターを事業主体とし、保育センター以外に福祉施設、介護老人施設、入所知的障害者施設、在宅支援福祉センターなどの開設運営を行っている。

2 この度の訪問で守屋先生にお目にかかることができ

れば、倉橋理論との関係を直接に伺ってみたいところであったが、残念なことに先生は昨年ご逝去されたということであった。

#### 参考文献

守屋光雄・原田碩三／共編『あそび保育のすすめ』中央法規出版 一九八五年

守屋光雄「保育一元化―北須磨保育センターの創設―」

日本保育学会編集委員会編『保育学研究』第三十五巻第一号 四五～四八 一九九七年

守屋光雄「幼・保一元化の実践と問題点(一)～(五)」日本保育学会第二三～二七回大会論文集 (一)七七～七八

(二)二九～三〇 (三)七三～七四 (四)二三～二四

(五)二六五～二六六 一九七〇年～一九七四年

守屋光雄『遊びの保育』に関する研究と実践(一)～

(二) 日本保育学会第二八～二九回大会論文集 (一)二三  
二七～三三八 (二)一四五 一九七五年～一九七六年

『倉橋惣三選集』三巻 フレーベル館 一九七五年